



非住宅部門  
事例

10

空き家利活用コンテスト2023 最優秀賞

## Goods & café みっくす

元薬局の空き家を蘇らせ  
米子の「時を経た良さ」を次世代へ



築130年、元薬局だった物件が、新たな息吹を得て若者や地域の人々が集うカフェ・ショップに生まれ変わった。明治20年代に建てられ長年空き家だったこの建物は、2020年冬に内覧を経て、腐朽や雨漏りにより傷んだ状態ながらも、そのレトロな雰囲気や職住一体の間取りが可能性を秘めていると感じ、賃貸契約を結ぶこととした。

改修では、単に不要物を処分するのではなく残されていた古い什器や昭和の家電を歴史館や古道具店に譲渡。SDGsの観点からも注目を集めた。また、元調剤室や古建具、土壁など、物件の持つ魅力を最大限活かしたデザインを採用。DIYによる珪藻土の塗装や、古材の再利用でコストを抑えつつ、唯一無二の空間を創出した。

一方で、残置物の整理など苦勞も絶えなかったが、オープン当初からSNSやメディアでの発信が功を奏し、県外からの来客も増え、近隣の高校生が放課後に集う場所としても親しまれている。

「古いからダメ」ではなく「古いから良い」と再評価されたこの場所。米子の商店街活性化の象徴として、新たな未来を示唆している。

若い頃の思い出の場所を再生し、若者や地域の人々が集まる場をめざした。自分たちで土壁や珪藻土を使いDIYすることで、愛着のある空間を創造。物件のアイコンでもある調剤室の雰囲気を残すため、カフェの商品だけでなく地元の作家作品の展示するなど、新しい形を生み出している。



歴史を経たレトロな空間の中で、今を生きる人々の作り出したものが合わさり、新しい空間価値を生み出している。



「とにかく世界観を残したかった」というオーナー。人の手だけでは作れない、ここだけにしかない世界観と地元で活躍する作家の作品を「みつくす」することで、ここに来ないと体験できない新しい空間価値を創造した。



もともと、2階に和室があったが劣化が進んでいた。そこで、開放的な吹き抜けに。元のテイストを活かしながら明るく開放的な空間に生まれ変わった。2階から眺める吹き抜けは雰囲気ある調剤スペース（現：厨房）があり開放的なスペース。土壁には昔の新聞が貼ってあったりと、時間の積み重ねを感じられ、ここにしかない空間価値を演出している。





押入れや床の間も活かしたカフェスペースが誕生。講座や演劇などの開催をはじめ、大人数でのレンタルスペースとしても活用されている。



[ DATA ]

- 【所在地】米子市日野町7
- 【構造】木造2階建て
- 【築年月】明治20年代
- 【改修後の用途】飲食店・小売店
- 【間取り構成】個室4室・キッチン2ヶ所・階段室・トイレ1ヶ所
- 【改修期間】2022年2月～2022年4月
- 【改修費用】約1,200万(設計等費含む)
- 【設計者】キミトデザインスタジオ